

地域振興とアユモドキ保護

府が亀岡市のJR亀岡駅北側で計画する「京都スタジアム」(仮称)について、建設促進を求める地元の保津町自治会と、専門家との意見交換会があった。予定地周辺に淡水魚「アユモドキ」が生息し、環境省と国際自然保護連合から「絶滅危惧1A類」にも指定されていることから、アユモドキの保護が計画を巡る争点の一つになっている。自治会側は地域振興に役立つと主張。専門家側は絶滅の懸念を示し、双方の考えは平行線をたどった。

自治会は、2003年から灌漑用ラバーダム(ゴム製可動堰)稼働時に、ダム下流に取り残されたアユモドキの救出活動を始め、05年からは密漁バトロール、08年からはアユモドキを捕食する外来魚を駆除するなど、保全活動も続けている。

今月7日に京都市大(京都市左京区)で開かれた意見交換会で、自治会側は意見書を提出。その中で、ダムの運用について「受排水田面積が減少し、このまま維持できる



昨年行われたラバーダム下流域でのアユモドキ救出活動＝亀岡市で

両立への道模索

保障はない」と予測。「アユモドキの生息条件は農と密接な関係にあるが、高齢者の高齢化と後継者不足から、保全活動の継続も困難な状況にある」と説明した。

更に「スタジアムとともに整備されるアユモドキの共生ゾーンを含めた都市公園計画は、地域振興とアユモドキ保護が両立する最終で最後の機会」と訴え、建設の推進に理解と協力を求めている。

亀岡「スタジアム」建設 自治会と専門家意見交換



スタジアム建設とアユモドキ保護について意見交換する専門家(右側)と自治会代表者ら＝京都市左京区の京都市大で

しかし、意見書を受け取った日本生態学会と日本魚類学会は、地元の現状に理解を示しながらも「生態調査は十分ではなく、このまま建設が始まれば絶滅する恐れが大きい」と従来の見解を伝えた。

自治会の塚田勇会長は「我々にも生活があり、地域振興の重要性を理解してほしい。専門家とは今後も活発にやり取りし、アユモドキにとっても人間にとっても良い未来を作りたい」と話した。

【富野健一】